

# 桃太郎と 鬼と巫女



東◎project  
靈◎&萃◎  
異種姦孕ませ (十出産) CG集







































鬼と人ならまだしも、猿や犬相手に  
まさか妊娠はすまいが、  
屈辱感は数倍、いや数十倍かも知れない。  
下等な存在に体を汚される怒りと悲しみに、  
射精を受け入れながら  
萃香は打ち震えている。







「う……………」

破水した。

「生まれちゃう……いやだ、やだああっ！」  
首をいやいやするようになりながら、  
本能的にいきみはじめる萃香。

だがここまでできてしまった以上、  
どんな抵抗も最早無駄だ。  
孕まされたメスが母親になるのを  
誰にも止めることはできない。

「い、いやあああつー！」

少女の絶叫とともに、股間からずるり、と『仔』が顔をのぞかせた。

「ありえない……こんなの、犬と、私の……」



毛こそ生えていない異形の姿だが、生まれた子供にはしっかりと2本の角が生えている。

「お前の血を継いでる証だな、わかりやすい」

「やだ、こんなの……こんなの認めない、私の子じゃないよっ」



動くことがままならない萃香の乳房に、  
二頭の半鬼半犬がむしゃぶりついている。  
三頭目は吸うおっぱいがないので、  
少し離れた場所に  
サルが用意した肉をうまさうに食っている。

「やめてよ、吸わないで……  
なんでこんな……」

消え入りそうな声で呟く萃香。  
サルがガラガラ声で  
今度は自分が孕ませてやるぞ、と  
笑っている。







「何なの」いつち…私の霊力が  
全く通じない！」

「いやあついでにいい獲物がかかったようだな」

「…あなた…この三頭のバケモノといい、まさか…？」

「説明が省けて助かるな。  
本来人間には魔獣の仔を孕むのは荷が重いが、  
何、色々と便利な薬もある…」

「貴方…萃香を、犯したのね」

「お前もすんずけなな。」































だが、そんな凌辱する側の都合など  
もはや霊夢には理解するができなかった。

理解を超えた出来事に、  
人の心は壊れることしかできない。

この日から霊夢は、飼い主たる古備津彦命の  
従順な4匹目のしもべとなった。























「少しだけ、休んではダメですか…?」  
ペロペロと巨大なサルチンポを舐めながら  
懇願するが、  
受け入れられるはずもない。

足元では早速立って歩き出した  
かわいいわが子が授乳を待っている。

(待っててね、今兄弟も産んであげるから…)  
霊夢はすぐ後に控える大仕事のために、  
奉仕しつつも、呼吸を整える。



























メリ：メリイイツ…!!!

精液には子宮を収縮させる成分が含まれているために、凄絶な陣痛が萃香を襲った。

そして必死の抵抗も空しく、灰色の小猿の頭が産道から姿を現した。

「これでオメーはオラのモンにもなったわけだなあ」

げらげらと嗤うサル。

「な、なののおかちゃん…やだよ…」

萃香の意識は暗黒の淵へと、ゆっくらゆっくら沈んでいった。





















































今回の妊娠は5回。

(あと.....45匹.....)

あまりに遠い道のりだ、霊夢は  
気が遠くなりそうだった。

萃香はどうしているだろうか。

自分と同じように、

仔を産まされていることだけは

確実だろう.....

















「あ~~~~っー!」  
「ん、んんん~~~~っー!」

悲鳴を上げながら、  
二人は次々と  
半鬼、半獣のパケモノ達を  
産み落とす。

そのどれもが良い子というわけではなく  
中には自分の母の口を  
早速犯すやんちゃ者までいる。



「と苦勞だったな、二人とも。

これでようやく

「仔」たちの頭数がそろった」

凌辱者たちのリーダーが  
事もなげに言うセリフ。  
用済みの自分達は  
どうなるのだろうか…  
二人は息を飲む。

「我らは仔を連れて」「」を去るが、  
お前達を殺せば子供たちの恨みを貰う」

「…」

「かたいつつ」のまま生かしておいても  
里心がついてな、甘えを逃げ戻ってくるかも知れん」

「なんだ…ふん…ふん…」



「鬼から奪った宝物の一つ、」

「時戻しの香」でお前達の時間を戻しておいてやろう」

そう桃太郎が言うと二人の目の前は  
一瞬で闇に変わり――

霊夢と萃香が目を開けると

そこはいつもの風景、博麗神社の  
境内だった。

「あれ？なんで私ここにいるんだろ……」

「呼んだ覚えもないんだけどなあ……」

「なんだか体がめっちゃ軽い」

「ホントだ……胸、もっと大きかった気がするんだけど」

違和感に首を傾げつつも、

何回かすると二人はそのことすら忘れて  
気楽で怠惰な幻想郷の暮らしに戻っていった。

だがその日以降、大型犬サイズ以上の  
動物を目にするたびに、

体が異様な疼きを覚えるのだけは、  
いつまでたっても慣れなかった。